

## マノエル・アキマサと賀茂在昌

海老沢有道

キリシタン関係史料を見ると、一五六〇年始めに京都において入信したマノエル・アキマサという人物があり、後に史料を示すように公卿で天文学者であるという。そうだとすれば、当然平安以来の陰陽・天文博士として著名な安倍家か賀茂家の一人でなければならず、日本における陰陽道的天文暦学が科学的

それへと発展する契機として、天文暦学史上のみならず、日本科学史において、また思想的には当時の知識人の入信動機・経路という意味において、西欧的合理精神の理解・体得という

意味において、大きくは近世文化の形成・発展という意味において無視できないものがある。したがって、私はすでに二十余年前にアキマサに論及して以来、何とかしてこの人物を日本史料によって確認し、その事蹟を明らかにしたいと考え、若干の小論というより調査過程を報告してきた<sup>(1)</sup>。幸いそれが日本天文学史の研究を進めておられる方々、特に東京天文台長広瀬秀雄博士のお目にとまり、同氏を中心とする研究グループの成果について御教示を与えられ、事蹟を明らかにするまでには至っていないが、アキマサを賀茂在昌に比定してまず間違いないと思

われる段階に至ったので、ここに従来の調査の報告をかねて今までに知り得たことを公けにし、なお今後も多くの方々の御協力・御教示を仰いで、彼の全貌と、史的位置を明らかにしたいと願うものである。

註(1) 『京畿切支丹史話』二五四―五頁、特に『南蠻学統の研究』四三―四、四六頁。

(2) 『薙びすくら』一一、一三、一五号。

## 一 外国側史料に見えるアキマサ

アキマサに関する史料として、従来われわれの管見に触れたもののうち、最も詳しいものは、著名なパアデレ・フロイス P. Luis Frois の『日本史』である。シュールハンマーの独訳に従って大要を掲げる。

一五六〇年か、その翌年のある日、法華宗の光浄院 Kwozoin の上人が僧俗三十名ほどを引き連れて宗論をいどんで来訪、パアデレ・ビレラ P. Gaspar Vilela からキリシタン教理を聞いて、それは仏教と全く異なるが、何はともあれ月の盈虚につい

ての解釈を聞きたいといい、まず彼らが黒白十五人の天人の話をした時<sup>(1)</sup>、

たまたまその時、アキマサ殿 Aquimasadono という非常に高貴の公卿 Cunge で、当時の日本において第一人者である陰陽学者 Astrolog が居合せていた。彼はかつて、このパアデレ「ビレラ」から日月の蝕と天体の運行についていくらか聴いていた。それにより彼はパアデレに対する尊敬の念に満たされていたので、ミマコ Meaco でキリシタンとなった最初の一人となったのであった。彼はみずからと、その妻、子供たち、及び従僕たちにも一緒にパウチズモを受けさせ、彼はアキマサ・マノエル Manoel という霊名をいただいた。彼はまた漢学をも学び、それにかなり精通していたので、彼は光浄院の坊主たちに云った。「私が貴僧の学識と權威の前に、また貴僧のお人柄に対して抱く尊敬と評価にもかかわらず、貴僧が述べられたこのような大きな虚妄と不合理なことを聞くことは私の遺憾とするところである。なぜなら月に關して、かかる表現で話されるならば、子供たちからさえ笑われることとなる。恐らく貴僧はまだお見知り置きがないが、ミマコにおいて私の名はお聞き及びびに相違ないと思う。私はアキマサと申し、天職として陰陽学をかしている者であるが、そんな釈迦の考えるような粗野なものではない」と。彼らはアキマサの名を聞くと、それ以下一言も答へもしないで立上り、立去った。マノエルは彼らが月について抱いてい

ることを進んで解明してやろうとしたのだが、彼らは、それ以上いたたまれなかったのである<sup>(2)</sup>。

パアデレ・ビレラが入洛したのは一五五九(永祿二)年の末のことであった。アキマサの入信を報じた日本人同宿ロレンソ Lourenço の、同年六月二日付都登壇後の会友宛書簡の記すところによると、それは一五六〇年一月二十五日他の家に移る前のところに記されており、パアデレらが入洛後一・二週間ごとに転々として一月十日ごろに入った三番目の住院でのことであつたらしい。したがってアキマサの入信月日は一月十一・二十五日の二週間にしぼってよいように思われる。村上博士の訳によると、

当院に於て山口に生れ、当地に居住せる身分ある武士一人キリシタンとなりたり。彼はアルキマサと稱し、他に十人彼と共にキリシタンとなりたり。

とあり、出身と名についてフロイスと異なった記述がなされている。この「身分ある武士」はポルトガル文では fidalgos principais とあるから、身分としては「貴族」と訳すべきであろうから問題はない。ただ当時のパアデレの記述では武士も貴族として表現されることが多く、同書簡は右の引用文に先立つて夜間二人の公家の来訪を伝え、彼らとは区別して訳されているところから村上博士は「武士」と訳されたものである。同書簡のイタリア訳文では un gentilhomo として、公卿とも武士ともとれる訳語が与えられている。山口の生れということには疑問を抱かざるを得ないが、戦乱を避けて西の京と称された山

口に下った公家もあり得よう。ラウレスは当時ロレンソがまだアキマサの公卿としての身分を知らなかつたためと解している<sup>(6)</sup>。アルキマサ Aquimasa という綴りも日本人名としては異様で、有教のイニエズス会史家バルトリーもこれに従っているが、

『日本イニエズス会離脱者名簿』によると、彼の子息に言及して、六番目「離脱者の」は伊子の國で生れた日本人メルシヨルで、都の最初のキリシタンのマノエル・アキマルサ Manoel Agui Marza の息である<sup>(8)</sup>。

ともあり、前掲ロレンソ書簡のイタリア訳文はイキマサ Iquimasa と記し、松田毅一氏は、ロレンソの現存する四写本を調査し、ラテン訳は Aquimace、イスパニア訳は Iquimasa、イタリア訳では Iquimaca と Jquimaca の二種を示しているなど、種々の綴りが見られる。これらは転写者や翻訳者が、不注意のために生じた混乱で、原型は容易に求め難いようにも思われる。しかし、フロイスの記す日本の固有名詞は、現存するものが簡本ではなく写本であるとは云え、大体において正確であるから、アキマサを採ることが最も穩当であらう。フロイスはつきに引用するように再び彼に言及した時にも「マノエル・アキマサ」と記している<sup>(10)</sup>。シニタインチェンは彼を土佐國同一条兼定の子の内政に比定し<sup>(12)</sup>、姉崎博士もまたそれを踏襲されたが、内政は一五八二年ごろ二十才で没した人物で入信した証拠もなく、問題にはならない<sup>(14)</sup>。公卿で陰陽学者で、諸文獻に共通する「マサ」の名を持つ人物とすれば、当然阿倍(土御門)か賀茂の両家の中に求めねばならない。

なお、アキマサは一五六五年始に豊後に赴こうとしてしばらく伊予堀江に滞在していたことは確實である。その年フロイスはアルメイダ Tr. L. de Almeida を伴ない、都に上る途すがら、堀江を訪れ、

そこでミアコで改宗した最初の数人のキリシタンたちに出合った。それからすぐに彼ら<sup>パアデレ</sup>はマノエル・アキマサという内裏 Dairi の朝廷の公卿で非常に高位の貴族の訪問を受けた。彼はパアデレやイルマンたちの到着を非常に悦び、それを表現するすべも知らぬほどであった。彼らは互いに慰め合い、夜の大部分をそこに過した。その悦びは余りにも大きく、彼は掃宅しようともしなかつたのである。彼は反対に朝までそこに留まり、デウスが彼と全國民に証しせられる御隣みについて彼らと語り明かした。彼は種な權威と学識をもった人で、デウスの御法について非常に明解な説明をなし、彼によって人々は明らかに「デウスの」ガラサの御働きを見ることができた。それで彼の家族は修道院のような觀を呈していた。翌日彼の夫人が分婉が迫つており、着弾距離の二倍ほど家が遠かつたにかかわらず、息子や息女たちをつれ、土産物をたずさへ、非常な喜びをもってパアデレやイルマンたちを訪れた。パアデレは彼女に慰めを与え、また彼らの労を謝した。というのは彼らはミアコから豊後に赴く途中であり、彼らにとつてもその地はまた見知らぬ土地であつたからである。彼は靈的指導を受けたのち、もう夜になったころ家に帰つたが、お互いにそれ

ぞれの旅の途中、この地で思いがけずめぐり会ったことを驚き合ったのであった。その夜、かの夫人が男児を生んだことは王の御恵みであった。翌朝直ちにバアデレにその知らせがあったが、出産のため非常に衰弱していたので、イルマン・ルイス・デ・アルメイダが薬を持って見舞い、お蔭で間もなく元気にさせた。<sup>(15)</sup>

以上がフロイスの記すアキマサに関するすべてである。アキマサが豊後に下って、その後どうしたかは外国側史料には見えないようである。西洋天文学に感銘したことが、一つの動機となつて入信したにしても、彼が果して豊後で新知識を獲得したかどうか不明である。のちに豊後府内に設けられたコレジオ——その後、長崎に移ったが——に学んだロドリゲス P. João Rodriguez, Tuzuzú が、かのすぐれた天文曆学に関する記述を残したことを思えば、<sup>(16)</sup> こうした初期にもバアデレを通して新知識を与えられる可能性が考えられるが、残念ながらわれわれはその証跡を見出すことはできない。

なおアキマサの子息について、若干の記録を見ることができ。さきを示した「イエズス会離脱者名簿」のメルシヨルは、「日本で入会したイルマン表」にも、

その同じ年「一五八〇」に日本人イルマン・メルシヨルが受け入れられた。彼は伊予の国の生れで、のちに退会させられた。<sup>(17)</sup>

と出ているが、フロイスは前引文に続けて、  
この貴族「マキマサ」は彼の信心の印として、一人の息子

- 郎博士訳『耶穌会士日本通信』一〇一—一頁。  
(4) 拙著『京畿町支丹史話』六〇—一七一—二頁参照。  
(5) Novevi Avisi delle Indie di Portogallo, Quarta parte, Venetia 1665, f. 29.  
(6) J. Laures, Die Anfänge der Mission von Miyako, Münster 1951, s. 46, n. 25  
(7) D. Bartoli, Dell'istoria del a Com. di Gesu. II Giappone, Venezia 1830, IX, p. 9.  
(8) Dos q̄ em Japão se forão o i despediram da Companhia (Bibl. da Ajuda, 49-IV-56) f. 3.  
(9) Japonica-Sinica, 4, ff. 111v, 115, 119, 123v.  
松田毅一氏「Padre Luis Frois 書翰目録並びに原文・写本」Evora 版日本書翰集の比較研究」(『キリシタン研究第八輯』三二—三頁)。  
(10) 松田氏「ルイス・フロイス著『日本史』の研究」(『キリシタン研究第五輯』一一二—一五頁)。  
(11) Frois, op. cit. s. 225.  
(12) M. Steichen, Les Daimyo Chrétienne, Hongkong 1904, pp. 131-133.  
(13) 姉崎正治博士著『切支丹伝道の興廃』一三三頁。  
(14) 松田毅一氏著『キリシタン研究第一部』五九—六二頁参照。  
(15) Frois, op. cit. s. 225.  
(16) J. Rodriguez, História da Igreja do Japão, Macau 1956, II, pp. 69—

をデウスの御奉仕に献げる決意をした。この者は当時十一才で、快活伶俐な少年であるが、後年口ノ津で病死した。<sup>(18)</sup>と記している。アルメイダも一五六五年十月二十五日付書簡においてフロイスと同様のことを記しているがアキマサに関しては名を記さず、単に「一人の身分高き武士」とし、

此武士は信心の為め一人の子息をデウスに献ずることを約せり。今約十一才なるが甚だ活発にして思慮あり、主彼に

恩寵を与へ信仰を続けしめ給はんことを。

<sup>(19)</sup>とある。この十一才の子が、メルシヨルだとすれば当然京都の生れのはずであり、「伊予のメルシヨル」とは呼ばれないであろう。が、一五六五年に堀江で生れた子とすれば、一五八〇年よりやく十五才であり、セミナリシタとしてはとも角、イルマンという正規の入会者としては年少にすぎないであろう。やはりメルシヨルは一五六五年に十一才であった子であろうか。フロイスは病死と記しているが、離脱者名簿には「退会の三四ヶ月後の一五八五年に、天草で告解もせず陰悲惨にも殺された」とある。<sup>(20)</sup>

註(1) 謡曲「羽衣」などに見える「月宮殿の有様……白衣黒

衣の天人の数を三五に分つて一月夜々の天乙女、奉仕を定め役をなす」とあるような観念である。なお渡辺

敏夫氏著『曆』一八六頁参照。

- (2) L. Frois—G. Schurhammer, Die Geschichte Japans (1549-1578), Leipzig 1926, s. 108.  
(3) Cartas do Japão, Evora 1598, I, f. 70. 村上直次

- (17) Imãos que forão recebidos em Japão (Bibl. da Ajuda, 49-IV-56), ff. 5-6v. (J. L. Alvarez-Taradiz, Valignano, Sumario de las Cosas de Japon, Tokyo, 1954, I, p. 71, n. 11).  
(18) Frois, op. cit., s. 225.  
(19) Cartas, I, f. 161v.  
(20) Bibl. da Ajuda, 49-IV-56, f. 9.

## II 日本史料におけるフロイス

このマキマサを誰に比定するか、前に記したように一条内政は問題にならず、フロイスらの記事からすれば、どうしても安倍・賀茂両家の人物であるはずであり、室町時代までは安倍家が本流であったから、私はまず安倍一門に望みを置いた。<sup>(1)</sup>が、結局徒勞に終り、神田茂氏に御教示を仰いだところ、やはり安倍・賀茂両家に比定すべき人物はなく、むしろ泉州曆(岸和田曆)を作った信太郷舞町の藤村という陰陽師の系統ではなからうか。すなわち藤村は安倍家の分流であり、神宮文庫蔵の万治三(一六六〇)年の曆に「泉州信太勝政」とあり、この分流に「マサ」の字が僅か一例ではあるが見出されることは、それを思わせるのであった。確かに外国史料に共通する「マサ」の字から求めて行くのが正しいであろうが、むしろ Alquimasa を採ると安倍(土御門)家では「天正期までは「有」が用いられ、この永祿期には有春(一五六九年歿)、その子有修(一五七七年歿)」という大物がいる。それで、「有」と「マサ」の両面か



まず『御湯殿上日記』天正八(一五八〇)年正月二十四日の条に、

わかみやの御かた、けふも二条に御いてあり。あきまさ御みかためにまいる。御ふくいたされてさせらるゝ。

また二月十七日の条に、

〔官路寺〕  
〔陰陽頭〕  
かんろしよりおんやうのかみあきまさけやうの事に文中さ  
れていたさるる。

さらに十二月二十二日の条にも、

あきまさあけかなの御こよみ、御はけともまいる。

と出ている。<sup>(5)</sup>これらの「あきまさ」が、パアデレ史料に出てくる「アキマサ」その人と思われる。「陰陽頭」とあり、また翌年の仮名暦を持参したことなどから、まず賀茂在マサということまでを確かめることができる。一方、前山氏は大分前には、アキマサを在康の子在理にあてて考えておられた由であるが、後には在昌に比定する考えをもっておられた由である。アキマサは前述の如く在康の子あたりに想定できる人物であり、在理も確かに有力候補の一人である。

そこでつぎに『歴名士代』<sup>(6)</sup>によって、在理の経歴を掲げることとする。『歴名士代』はその後書きにあるように本来は応永年間から永禄二(一五五九)年までの五位以上三位以下の公家の補任記録を書留めた山科言継の草稿であるが、類従本は権少外記中原友昌が貞享三(一六八六)年に写したもので、永禄二年以後も補筆され、慶長年間に及んでおり、追記者を明らかにし得ないが、この時代の記録として信頼の置けるものと考えられ

る。

さて、この『歴名士代』によると慶長七(一六〇二)年に従五位下に叙された賀茂在理なる人物があるが、これはその叙位と年代から推してまず同名別人であると思われる。もう一人の在理の経歴はつぎの如くである。

賀在理 享禄四(一五三二)年三月二十七日 従五位下

同年三月二十九日 兵部少輔

同年六月二十日 権暦博士

天文二(一五三三)年六月二十三日 左馬権頭

同四(一五三五)年七月二十八日 従五位上

天文五(一五三六)年十一月二十二日 正五位上

同六(一五三七)年正月十七日 暦博士、同日 漏

刻博士

同十(一五四一)年六月二十七日従四位下。従二位

賀在富卿去年御不御所賞讃。

同十一(一五四二)年閏三月二十七日 安芸介

同十四(一五四五)年十一月二十八日 従四位上

同二十(一五五一)年四月一日 正四位下

『歴名士代』によって知られる在理の経歴は以上であるが、残念ながら「アキマサ」が入信した一五六〇年ごろのことは記されていない。数年ごとに位階が進むとすれば、当然そのころのみならず、その後も記載されそうなものであるのに、そのことがなく、『御湯殿上日記』に記された人物と結びつけられそうもない。また「在理」を「あきまさ」とよむ明証がない。

しかし『歴名士代』には、前山・広瀬両氏も比定されるように、より注目すべき人物、在昌がある。右と同様に経歴をまとめて示すとつぎの如くである。

故在富卿子  
賀在昌

天正五(一五七七)年閏七月十二日 従五位下

天正九(一五八一)年十月十九日 従五位上

慶長四(一五九九)年三月二十六日 従四位下

慶長八(一六〇三)年卒。八十一。

卒年から逆算して生年は大永三(一五二三)年。入信の一五六〇年において二十七・八才ということになり、当時はまだ堂上に列せられていなかったことになる。位階は従四位下どまりのため『公卿補任』にも記載がなく、右のような極めて簡単な経歴しか判明しないが、前に推定したように在富の子であること、さらにその名といい、一五六五年において子供が十一才から当才という父親としての年ごろといい、パアデレ史料に見えるものと最もよく一致する。とすれば、アキマサの入信を報じたロレンソがまだ在昌の身分をよく知らず、前夜来訪した二人の公卿と別記したこともうなずけるし、フロイスの記す法華僧との問答において、彼らがその名を聞いて退散したことも、もつとものことと思われる。当時、父の在富はすでに宮内卿を引退していたが、正二位の高位の人であったからである。ただし彼は永禄八(一五六五)年八月十日癩腫を病んで卒しているが、アキマサが家族を連れて伊予に下り、フロイス及びアルメイダらと出会ったのは一五六五年一月中旬のこと<sup>(8)</sup>で、在富死去前のこととなり、そこに一抹の疑念を抱かざるを得ないものがある。

右の『歴名士代』の氏名の傍記の「実」以下が読まれていないが、他の例から推してそこには何某子などと養子縁組が記入されていたはずである。在富には実子がなかったらしく、前記のように在種を養子にしたが、『尊卑分脈』(書陵部蔵本)によると、天文十七(一五四八)年三月二十三日安芸介に任官しているが、「同廿二十四横死廿一才」とあり、諸本にも「父卿害之」とある。したがって、その後在昌を養子にしたのではないかと推定する。余りに想像にすぎようが、在昌も晩年在富と相容れず、何ものかを頼って西下したものであったかも知れぬ。またアキマサが『御湯殿上日記』の「あきまさ」と同一人物とすると、当然彼は養父の死後、また京都に帰って陰陽頭に任ぜられていたことになるが、それを証する内外史料もまだ他に見出さない。しかし、新史料を見出さぬ限りは、まずアキマサはこの「あきまさ」であり、賀茂在昌であると比定してさしつかえないと思われる。

註(1)『京畿切支丹史話』二五四―五頁。

(2)『科学史ノート』(『天文総報』一六ノ八、一九六二年八月号)。

(3) 太田亮氏著『姓氏家系大辞典』第一巻賀茂氏(30)の項も在富までの記載しかない。

(4) 同年四月から閏六月まで四ヶ月の日記にすぎぬが、三好・松永氏の動静など、当時の京都の情勢を知る上には貴重な史料である。紙背文書は綴じてあるためによく見られないが、ほとんどが消息類で、当時の史料の

- 不足を補うものが多いように思われる。
- (5) 刊本七卷二九五、二九八、三五七頁。
- (6) 『続群書類従』巻五一〇。
- (7) 『公卿補任』による。在富はじめ在秀または在季と称し、延徳二(一四九〇)年生れ、永正四年従五位下、同七年

在富と称し、同九年曆博士、十一年陰陽頭。同十五年兼任瀧刻博士、十六年兼任左馬権頭、十八年兼任丹波介、辞権頭、大永二年兼任宮内卿、辞陰陽頭。天文四年正三位。同二十年正二位。

(8) Cartas, I, f. 161; Frois, op. cit. s. 225.

## 新刊紹介

### 相模原市史編纂会編 相模原市史 第一巻

神奈川県相模原市は現在、十五万人の人口をようし、昭和三十一年「首都圏整備法」により、市街地開発区域の指定をうけ、急激な都市化現象をみせるようになった。このような市の様相の変貌の結果、市内の歴史・民俗・考古などの資料は散佚・消滅の危機にたたされていた。

こうした時、相模原郷土懇話会による資料の収集・保存の献身的な努力の結果、一般市民の間に市史編纂を要望する気運が高まるようになり、昭和三十九年市制十周年を期して市史刊行のはこびとなった。

市史の構成は通史編四巻・資料編二巻の全六巻の予定である。今回刊行されたのは通史編第一巻で、後北条氏滅亡までが扱われている。内容の編別は次の通りである。

序編 市制施行十周年の相模原市

- 第一編 相模原の自然環境と研究史  
第二編 原始時代の相模原  
第三編 古代の相模原  
第四編 中世の相模原

このうち、岡本勇氏(本学専任講師)は第二編と第三編第一章の執筆、杉山博氏(本学会員)は第四編の執筆と全編の校閲にあたっておられる。

第一巻からみた市史の特徴は編集方針に、日本全体の歴史的発展と相模原市の展開を密着させてとらえ、さらに、庶民が歴史の主体であったことを展開の軸としてつらぬいている点である。また、現に学界の第一線で活躍している研究者が編纂にたづさわっているのも、内容的にも最新の研究成果をとりいれ、高い学問的水準をもち、しかも、一般の人にも容易に理解できるように記述や表現に周到な配慮がはらわれている。

従来のせまい「郷土史」から完全にぬけだし、市史としては第一級の出来ばえであろう。(昭和三十九年十一月、六七四頁、相模原市役所刊)。